

「真宗相伝義書」に学ぶ

——親鸞の二種回向観——

廣瀬 惺

はじめに

現在、東本願寺出版部から「真宗相伝義書」（以下「相伝義書」と略称する）が刊行中である。それは、江戸期における東西本願寺の学寮・学林の教学の隆盛とともに埋れていった、それらに先立つ真宗教学の集成であり、蓮如に始まるとされている。その歴史的な詳細は庄司憲氏の論稿に詳述されているところであるが、第一回配本時の折り込みには、「刊行のことば」として、

このたび刊行の運びとなった『真宗相伝義書』は、実はそのような蓮如上人の教学を集成したものであり、その存在はごく一部の人のみ知られていたにすぎない。本書の内容は、蓮如上人の自筆本とということではなく、蓮如上人が善知識（法主）相伝として講述され

「真宗相伝義書」に学ぶ

たものであり、その相伝を傍らで聴聞することを許された五家・三家を継承する今日の五箇寺寺院の中で、蓮如上人の相伝の教学として後に展開してきたものである。

この相伝の教学は、歴史的には本願寺第十八世、従如上人の頃、高倉に学寮が創設され、その学寮教学の權威が強固になるにすぎたが、遅くとも高倉に創設されたのである。

と紹介されている。

当朋学園仏教文化研究所の研究分科会「相伝義書分科会」において、遅々とした歩みではあったが、ともかく共同して読もうということで、『相伝義書』の中核をなすものと思われる、第三巻所収の『教行信証』の講述に基づく聞書である『深解別伝』の学習を輪読形式で進めてきた。このたび、一通り読み終えたところで、その一応の区切りとして、『相伝義書』に関して学び得たところをまとめてみようということにな

ったわけである。

しかし、正直なところ、現時点において「相伝義書」について直接的に何かを論ずる自信は全くない。それは、何よりも私自身の力量によるところであるが、また、「相伝義書」そのものが現在まだ刊行中であることにもよる。そのような段階で論述することは、「相伝義書」そのもの了解という立場からするなら、極めて不十分の誹りは免れえないし、また、誤まりの多いことにもなるかと思う。ただ、私自身の現在の課題である「二種回向」について、「相伝義書」とくに『深解別伝』に学びつつ尋ねたいと思うことである。

なお、「二種回向」については、既に『同朋仏教』第二十号に、「親鸞の二種回向観——凡夫往生道の確立——」として論じたところである。論旨として重複することも予想されるが、本論では、改めて「相伝義書」に尋ねなおし、さらに、そこでの不十分な点をより明確化できればと願うことである。

一

『教行信証』「教巻」冒頭に、

謹んで浄土真宗を按ずるに、二種の回向有り。一つには往相、二つには還相なり。^①

と記される如く、二種回向は浄土真宗の根本原理である。さらにいえば

親鸞が帰依した浄土真宗なる宗教世界の全てを尽くすものである。即ち二十九歳の親鸞をして帰せしめた、

たと念仏して弥陀にたすけられまひらすべし。^②

なる一言、選択本願念仏なる師教の徹底領受の歩みにおいて、ついに見開かれたダイナミックな宗教的自覚の世界である。

ところで、親鸞の二種回向について、従来どのように了解されてきたのか。一概にはいえませんが、一般的に、香月院深励師の、

廻向と云ふは如来の方から施与し給ふが廻向なり。(中略)如来の功德を、これも衆生の為め、此れも衆生の為めと、衆生にめぐらし

向はしむるが廻向なり。また往相還相と云ふは、衆生の方にあることなり。(中略)往還二相は衆生に約して名を得るなり。廻向の言

は弥陀に約して、衆生が娑婆より浄土に往生する往相も、浄土から立ち還りて、衆生を済度する還相も、皆な他力廻向なり。それを二

種の廻向と云ふ。^③

との釈に代表される如く、「回向」は如来に属し、「往相・還相」は衆生に属すると了解されてきたといえよう。如来の回向によって、衆生のうえに往相と還相の二相が実現するというのである。今日、『教行信証』の一般的な手引き書とされている、山辺習学・赤沼智善共著の『教行信証講義』にも、

聖人の義に従えば、二種廻向のうち、往は往生浄土で、還は還來穢國度人天である。相は相状の義ですがたということである。往相・

還相というは衆生に属し、廻向は弥陀如来の方に属する。浄土に往生し、穢土に還来して人天を度する力用を弥陀如来より我等に廻転廻向して下されたが二種廻向である。

と述べて、やはり同様の了解が示されている。しかし、親鸞の二種廻向についての表現に立ち返ってみるとき、かかる了解は困難ではないか。

例えば、『浄土文類聚鈔』に、

然るに本願力の回向に二種の相有り、一つには往相、二つには還相なり。

といい、また『如来二種回向文』には、

如来の廻向に二種あり。一には往相の廻向、二には還相の廻向なり。

と記されている。それらの文を素直に読むなら、どこまでも、本願力・如来の回向そのものに二種の相があるのであり、往相・還相は回向の相の二種相としか了解できないのではないか。そのことは、さらに、何よりも『教行信証』所引の『論註』の二種回向の文に対する親鸞の訓みにあらわれている。親鸞は、

云何が廻向したまえる。一切苦悩の衆生を捨てずして、心に常に作願すらく、廻向を首として大悲心を成就することを得たまえるが故にとのたまえり。廻向に二種の相有り。一つには往相、二つには還相なり。往相は、己が功德を以て一切衆生に廻施したまいて、作願して共に彼の阿弥陀如来の安樂浄土に往生せしめたまうなり。還相は、彼の土に生じ已りて、奢摩他毗婆舍那方便力成就することを得

て、生死の稠林に廻入して、一切衆生を教化して、共に仏道に向かえしめたまうなり。若しは往・若しは還、皆衆生を抜きて生死海を渡せんが為に、とのたまえり。

と訓む。それは、往相・還相を如来の事として、如来の回向そのものの二相という了解に立った訓みであるといわなければならない。往相は、如来がその功德を一切衆生に回施して、共に阿弥陀の浄土へ往生したもう相であり、還相は、如来が生死の稠林に廻入して一切衆生を教化し、共に仏道に向かえしめたもう相である。故にまた、親鸞はその文に引きつづいて、

又云わく、淨入願心は、『論』に曰わく、又向に觀察莊嚴仏土功德成就・莊嚴仏功德成就・莊嚴菩薩功德成就を説きつ。此の三種の成就は、願心の莊嚴したまえるなりと、知る応しといえりと。応知は、此の三種の莊嚴成就は、本四十八願等の清淨の願心の莊嚴したまう所なるに由って、因淨なるが故に果淨なり。因无くして他の因の有るには非ざるなりと知る応しとなり、と。

と、如来の願心による莊嚴浄土の文を引くのである。この願心莊嚴の文が、先の二種回向の文の往相回向の内容を、さらに押えるものであることは、次に、

又『論』に曰わく、出第五門は、大慈悲を以て一切苦悩の衆生を觀察して、応化の身を示して、生死の菌・煩惱の林の中に廻入して、神通に遊戯し教化地に至る。本願力の回向を以ての故に。是を出第

五門と名づくとのたまえり、と。^⑩

と、還相回向を示す園林遊戯地門の文が引かれていることにより明らかである。

以上の如く、親鸞の二種回向についての表現からして、勿論、

南无阿弥陀仏の廻向の 恩徳広大不思議にて

往相廻向の利益には 還相廻向に廻入せり。^⑪

の『和讃』に代表される如く、その他の表現においてさらに尋ねなければならぬ側面もある(この点については後述する)にせよ、親鸞は二種回向を、根本的に如来回向そのものの二種相として扱っていたといえよう。そして、「相伝義書」は、基本的にかかる了解に立って親鸞の二種回向を釈していると思われる。「相伝義書」によりつつ、さらに親鸞の二種回向観を尋ねたい。

二

『深解別伝』には、先に述べた、「回向」を如来に属せしめ、「往相・還相」の二相を衆生に属せしめるといふ、二種回向に対する一般的了解に ついて、

通度以爲、阿弥陀如来因位果上の功德利益を得て、凡夫が往生するを往相と云い、往生しおわりて還來穢國度人天と、我が娑婆へかえるを還相とおもえり。これも成る程、二種廻向の一分ならぬにはあ

らねども、ともに機より立つ処の法門なり。^⑫

と述べて、それは機に立場を置いた一分の了解であって、通途の了解であると指摘する。同じく、『略本私考』にも、

まず通途の義をいわば、我等が往還は阿弥陀仏の御功德にして、何事も何事も他力ぞと、口にもいい心にもおもいながら、能所をわけて信ずるたぐいは、機の安心なり。^⑬

と、同様の指摘がされている。されば、「相伝義書」ではどのように了解するのか。

まず往相回向について、『深解会通』に、

往相とは弥陀如来弘願を発し、浄土を莊嚴し、衆生をして其の土に往生せしめたまう相を往相と云うなり。相は相貌の義なり。(中略) 往相回向に値い奉らねば、凡夫の証果をうること成じ難し。^⑭

といい、また『深解別伝』には、「故大僧都、故貫首に上らるる筆記に云わく」の文として、

先ず往相は仏の自利にして、即ち衆生の往生の相なり。其の衆生往生の相を入の四門に成就して(兆載永劫 積功累徳) 凡夫の方へ廻らし施し、衆生を他力に向えしめたまうを(令諸衆生 功德成就) 如来の(往相) 廻向と伝えたまえり。^⑮

と記している。

『深解別伝』に、往相を仏の自利として、それがそのまま衆生往生の相であるといわれている。そのことの意味は、『深解会通』に「衆生を

して其の土に往生せしめたまう相を往相と云う」とある如く、往相を単に衆生往生の相と解するのではなく、如来が衆生をして往生せしめたまう相をもって往相であるとするのである。そこに、さらに往相の「相」について、「相は相貌の義なり」と述べているが、その「相貌」については『略本私考』に、

「往」は往生なり。「相」は相貌なり。その相貌は「大行」「淨信」なり。^⑤

と押えられている。それは、「相」を、如来回向の大行・淨信による衆生往生の相貌とするのではなく、大行・淨信そのものが往相の相貌であるというのであり、大行・淨信に、衆生を往生せしめたまう如来の往相をみるということである。

されば、「相伝義書」の往相回向の釈は、先にみた、

往相は、己が功德を以て一切衆生に回施したまいて、作願して共に彼の阿弥陀如来の安樂淨土に往生せしめたまうなり。

との、親戀の往相回向の表現に契合するものであるといえる。そして、その文の「回施」の語に往相回向を特徴づける内容をみるなら、その「回施」こそ、衆生と共に往生したまう如来の往相が、衆生のうえに行・信として表現してある相なることを示すものである。

では、次に「相伝義書」では、還相回向についてどのように積しているであろうか。『教行信証』「証卷」の、

然れば弥陀如来は如従り來生して、報応化種種の身を示し現わした

まうなり。^⑥

の文に還相回向了解の基本的立場を置いている。「深解別伝」には、

「弥陀如来、從_レ如来生、示_ニ現_シ報_ヲ・応化_ノ種種身_ニ」と釈したまえる「從如」の当体、「如」というのは、阿弥陀仏の御ざとり真実証果なり。「來生」とは、還相廻向の相なり。その相を開いて、「真

化」の兩卷なり。「一如法海（從如）よりかたちあらはし（來生）たまふ」とのたまえるはこれなり。この還相廻向の姿をひらいて、

報身は「真土卷」、応化身は「化身土」の本、種種身は「化身土

の末なり。黒谷の「色あるもの、声あるもの、みな阿弥陀の名なら

ぬはなし」と言える如く、「化土卷」に引顯したまう日月星辰、天

竜鬼神、乃至『弁正論』、『論語』の文までも何れか隨類応同の種種

身示現の相ならざるはなし。即ち卷初に「夫_レ掘_ニ諸修多羅_ニ勘_ニ決_ニ真

偽_ニ・教_ニ誠_ニ外_ニ教_ニ邪_ニ異_ニ執_ニ」と言える、種種身を現じて化を施すに善

不善ともに信謗同じく因と成りて、往生淨土の縁を成せしめんとな

り。この「真」「化」三卷の頭われ処は、この「從如来生」からな

り。みな、善門示現の大悲を開きたまう姿なり等^⑦云々。

と述べられている。この文をどのように了解すればいいのか。特に、真

仏土をも還相としている点について未だ了解しえないところである（化

身土が還相であるについては後述する）。しかし、同じく『深解別伝』

に、

通途に還相というは、面々がなすことと覚えて居るなり。祖師一流

の思召しは、「利他敎化地」とは阿弥陀如来の方便法身・為物身の
方の御名なり。^⑧

とも述べる如く、還相を如来の還相と押え、阿弥陀如来の方便法身・為
物身と押えていることからして、また、先の文において「従如来生」、
それと同意の『一念多念文意』の、

一如宝海よりかたちをあらわして、法蔵菩薩となりたまひて、无
導のちかひをおこしたまふ……^⑨

の文をもって解しているところからして、基本的に、一如が方便法身な
る法蔵菩薩として衆生の現実に顕現せんとする相を還相回向と解するも
のであるとして間違いでないと思う。そして、法蔵菩薩こそ、如来の還
相回向成就の相なのである。

かくいいうるとするなら、「相伝義書」の還相回向の釈は、
生死の稠材に廻入して、一切衆生を敎化して、共に仏道に向かえし
めたまうなり。

との、親鸞の還相回向についての表現に契合するものであるといえよ
う。

以上の如く、「相伝義書」は、往相・還相を如来の回向の二種相とし
て釈するのである。かくて、さらに『深解別伝』では、

上の往相は、仏の自利成就なり。此の還相は、仏の利他成就なり。

自利利他満足の法体よりあらわるる往還二種なり。^⑩

と明確に押え、また『略本聴書』では、

仏心の上の往還を今二種に開きて釈する。^⑪
と述べるのである。

されば、かかる「相伝義書」の二種回向の釈——それは同時に親鸞の
二種回向観ともいえるが——は、如何なる宗敎的事実を述べるものなの
であろうか。

三

親鸞の宗敎体験の特質は、

称名憶念有れども、无明なお存して所願を満てざるは何ん。^⑫

と問われる如き危機的課題をくぐって、阿弥陀に自己が南無するとい
う、自己と阿弥陀との外的対応関係を破って、自己の根源に、まさしく
南無の主体として、阿弥陀の因位なる法蔵菩薩を体験したことにある。
かくして、

歸命は本願招喚の勅命なり。^⑬

という。而して、そのことは、『大無量寿経』に説かれる如く、如来の
本願を因位なる法蔵菩薩の本願として自己の内に体験したことにほかな
らない。「二河譬」の、

衆生貪瞋煩惱中能生清淨願往生心^⑭

の「能生清淨願往生心」について、『敎行信証』および『浄土文類聚鈔』
ともに、あえて、

能生清淨願心^②

と私積するのは、かかる事実を示すものである。内なる願往生心として、如来の本願が体験されているのである。

さて、しかし、本願が自己の内に体験されたとはいえ、それはどこまでも如来の本願なのであって、自己に内在的な心理として捉えることは許されない。かかる信心の相を、親鸞は、

自性唯心に沈みて淨土の眞証を貶す。^③

と批判するのである。本願は如来の本願として、どこまでも、煩惱存在たる衆生を超越するところに、根拠するものでなければならぬのである。衆生に即していえば、直接的に内に見出されるものでなく、否定を通過して、即ち「罪惡生死の凡夫」たる自覚において出遇わるべきものでなければならぬのである。かくて、親鸞は法蔵菩薩の名をもって經説される本願について、

弥陀仏の御ちかひを、法蔵菩薩われらに廻向したまへる。^④

と、本願は、その本来性において衆生を超越せる果上の弥陀の本願なのであり、それをいま、因位法蔵菩薩がわれらに現実の本願として回向するのであると述べるのである。そこに、親鸞による二種回向開頭の根本がある。

即ち、親鸞によって開頭された二種回向は、本願の超越性と内在性の原理として見開かれたものであるといえよう。如来が本願者法蔵菩薩として「生死の稠林に廻入」する、如来の従果回向の相が還相回向であり、

本願者法蔵菩薩が生死の現実を生きる衆生のうえに自己を表現（回施）して、共に淨土に生まれて阿弥陀たらんとする如来の従因回果の相が往相回向である。されば、往相・還相の二回向はその自覚界において無窮の円還性をなすものであるが、往生せしめられる衆生からするなら、還相回向は往相回向の根拠となるものであり、内在して自己を救済する本願は、還相回向成就なる往相回向の本願であるといわなければならない。

「相伝義書」において、

四十八みな果後、還相の大悲なり。^⑤

といわれ、

往還に於いて前後を論じて、往は先き、還は後と云うことなれども、往還かつて前後なきなり。本、往還は不二なり。往の当体、すなわち還なり。還の当体、すなわち往なり。今日往相廻向の心行をうるは、阿弥陀如来の還相の大悲によりてうるなり。^⑥

といわれ、

十一願果をうるは、二十二の御願廻向の益ぞとなり。利他正意、衆生が為の仏となるは、還相の益なり。^⑦

等といわれるのは、かかる還相回向成就なる往相回向の本願であることを示すものであらう。そして、さらに、二種回向との値遇について、

然るに不思議と信ずるより外はとかくの計いつきて崇み信ずるようになったは、二種の回向の仏の本願なり。^⑧

といい、また、

今日衆生の一分に、この還相の益を蒙る時をいえば、如来の大悲よりして功德を与え施したまう宿善開発の信心を獲得せしめたまうを、利他教化地の果益と言う（出第五門廻向成就）。これを還相廻向にあい奉ると伝えたまうなり。然れば、往還の名は二つにして、衆生の蒙る処の利益は、唯、一時に二種の益が顕わるるなり。是の故に、往の当体即還、還の当体即往なり。二にして不二、不二にして二、同じからず異なるべからず。

と述べて、往還は不二であり、往相回向の信心獲得のところに二種回向との値遇があるとす意も、本願との値遇が全てであり、それは、還相回向成就なる往相回向の本願との値遇であることを示すものであるといえよう。かくて、『略本私考』には、巧みな譬喩をもって、

往相還相ともにみな如来の他方方便にして、自然道理のいたすところなり。喩えば、一切のものの種を地にうゆるときは実とならんことを期し、実となりては種とならんことを期す。種となりて地にうゆると云うは、如来の他方往相廻向なり。実となりて種とならんことを期すというは、還相廻向のころなり。

と、往還の不二性を示すのである。

以上の如く、往還の二相を如来回向の二相としてとらえ、信心獲得の一事のところに二種回向との値遇を体験するとするなら、親鸞における二種回向による救いとは、如来と衆生とを固定的に対立せしめ、如来が

衆生に実体化された何かを与えるということではない。まさしく、自らの内に苦悩の衆生を見出すことにより、そのことを契機として従果向因（還相回向）し、従因向果（往相回向）する実動する如来との値遇であったといえる。衆生を救わんとして作動する本願の事実以外に回向の事実はないのである。『深解別伝』には、回向について、
本を尋ねれば、大悲の欲生心ばかりなり。
という。また、親鸞は、

これらの大誓願（第十七・十八・十一願）を往相の回向とまふすとみえたり。（カツコ内筆者記）

と述べて、「往相の回向の願」ではなく、誓願そのものをもって「往相の回向」と了解しているのである。

されば、再度、

往相は、己が功德を以て一切衆生に回施したまいて、作願して共に彼の阿弥陀如来の安樂浄土に往生せしめたまうなり。還相は、彼の土に生じ已りて、奢摩他毗婆舍那方便成就することを得て、生死の稠林に廻入して、一切衆生を教化して、共に仏道に向かえしめたまうなり。

との文に立ち返って考えるに、親鸞の場合、「回施」をはずして「回向」の事実はないにせよ、真ちに「回向」イコール「回施」とは解しえないのではないか。従果向因し従因向果する、如来の衆生救済の力用が「回向」であり、その回向について、従果向因の相である還相回向の事実内

容が生死海への「回入」、衆生と共なる従因因果の相である往相回向の事実内容が一切衆生への「回施」であるといわなければならない。

故に、『深解別伝』では、『教行信証』「信巻」真仏弟子釈の、

往相回向之真心徹到^⑧

の文を釈するに、通常の釈の如く「如来の回向によって、衆生に往相を実現する如来の真心が徹到した」と解せず、

往相回向の真心が成就して如来の方にあるとばかりでは、その詮なし。徹到して法界衆生へ顕われねば円融の教にあらず^⑨。

と述べて、文字通り、如来の「往相回向の真心」が衆生に徹到して顕現（回施）すると解するのである。それは、

阿弥陀如来の凡夫のために御身勞ありて、此の廻向を我等にあたへんがために、廻向成就し給ひて、一念南无と帰命するところにて、

此の廻向を我等凡夫にあたへましますなり^⑩。

と述べて、回向を回施するとする蓮如の述べるところと同意であるといえよう。されば、「回向」と「回施」とは直ちにイコールではなく、「回施」は還相回向の「回入」と対応して、往相回向の事実内容であるといわなければならない。衆生のうえに、如来の往相回向が行信として表現（回施）されるのであり、その表現（回施）された行信こそが、如来の衆生と共に往生せんとする往相回向の相なのである。

しかし、かくいえばとて、衆生にとって、回施の事実を離れて回向はない。回施において、往還二相の回向は衆生救済の大悲行たりうるので

ある。故に親鸞は、回向を回施と同義に使用する場合もあるのである^⑪。

さて、ここで、「相伝義書」が化身土をもって還相の相としていることについて尋ねておかねばならない。しかし、先述した如く、真仏土をも還相の相としていることからすれば、化身土についてのみ述べることは、当然不徹底の感を免れえず、一言付言するに止めるほかはない。

化身土を還相の相としているについて想起されるのは、曾我量深師の、

阿弥陀の国は二重構造である。眞実報土と方便仮土である。（中

略）法蔵菩薩は穢土にて修行しておいでになる、淨土のみならず穢

土まで阿弥陀仏の国、即ち因位の国と果上の国である。（中略）方

便仮土と穢土とは同じである、淨土の外は穢土、内にては仮土、体は一つ^⑫。

との指摘である。穢土をして法蔵菩薩修行の土として、方便化身土たるの意義を有するとの指摘である。「相伝義書」が化身土をもって還相とするについて、『教行信証』「証巻」の「従如来生」の語、さらに、『一念多念文意』の、

一如宝海よりかたちをあらわして、法蔵菩薩となりのたまひて……の文に還相の根柢を見出していることからして、恐らく、曾我量深師の指摘と同意をもって、化身土を還相と了解しているものといえよう。

まさしく、穢土の根源に従果向因したまえる法蔵菩薩を感得するとき、穢土は如来の教化土としての意義を有して、人間の営為のすみずみ

に至るまで、法蔵菩薩修行の相の影を宿するのである。そして、さらには、人間の一切の営為そのものうえに、法蔵菩薩化現の相を仰ぐこともなるのであろう。そこに、穢土を化身土として見出され、還相の相として了解されることになるのであろう。

四

二種回向について、「相伝義書」によりながら、往相を如来の自利の相にして衆生と共に浄土に往生したまう相、還相を如来の利他の相にして生死の稠林に廻入したまう相と了解してきた。しかし、親鸞の二種回向についての表現をみるとき、かかる了解のみに尽きるものではない。そのことは、

南无阿弥陀仏の廻向の 恩徳広大不思議にて

往相廻向の利益には 還相廻向に廻入せり^①

との『和讃』の表現に端的にうかがうことができよう。そこには、南无阿弥陀仏の回向に値遇した身の事実として、還相回向に回入したことが、深い恩徳感をもって讃せられている。それは、還相回向が、南無阿弥陀仏の回向に値遇した者の境域となることが讃せられているといわなければならない。されば、この和讃の意は、

安楽无量の大菩薩 一生補處にいたるなり

普賢の徳に帰してこそ 穢国にかならず化するなれ^②

安楽浄土にいたるひと 五濁悪世にかへりては
釈迦牟尼仏のごとくにて 利益衆生はきわもなし^③

如来の廻向に帰入して 願作仏心うる人は
自力の廻向をすてはて、 利益有情はきわもなし^④
等の和讃の意に通ずるものである。

しかし、これらの和讃の表現において、利他教化なる還相回向が衆生の事としての共通性を有しつつも、一見するに、一方ではそれを現在の事とし、他方では浄土往生後の未来の事としている点において差異性を有するが如くである。その問題をも含めて、それらの表現は、二種回向、就中還相回向のいかなる事実を表しているのであろうか。

それらの表現は、「相伝義書」をもっていえば、恐らく、「二種回向の一分」・「機より立つ処の法門」といわれている内容に相当するものであろう。それらの表現を解するに、全てを实体化して執を質とする衆生の分別心を立場として解してはならない。どこまでも、如来回向の信心に依る表現なのである。まさに、「南無阿弥陀仏の回向」のところに開かれる二種回向（還相回向）の表現なのである。

既に見てきた如く、「南無阿弥陀仏の回向」、それは、如来の還相回向成就なる往相回向の本願が、衆生の現実界に顕現（回施）・発起した事実である。そこに、衆生は流転の生が破られて浄土に開かれた生が獲得

されるのである。しかし、そのことは、衆生の煩惱性が消去されたことを意味するものではない。その行信は衆生の煩惱性の真只中に顕現した如来往相回向の行信なるが故に、衆生のうえに浄土の生を開くと同時に、衆生の煩惱性を徹底して凝視するのである。そして、そこに、無辺なる生死海を荷負し尽くさんとして、自らの根源なる、既に生死海を荷負してある還相回向成就の法蔵菩薩の願心に感応を求め、法蔵菩薩の願心を自らの境地としていくのである。

思うに、信心がそのように還相回向成就たる法蔵菩薩の心を心として現実を荷負せんとする信心なるが故に、煩惱の現実を一步たりとも離れえない衆生の全き救いになるのではないか。さもなければ、信心は、衆生としての現実を遊離して、極めて個人的な一特殊心理に墮するほかないであろう。『歎異抄』の第九条には、踊躍歡喜を求めて一特殊心理と化せんとする唯円の信心の問いに対して、親鸞は、

よろこぶべきころをおさへて、よろこばざるは煩惱の所為なり。
しかるに、仏かねてしろしめして、煩惱具足の凡夫とおほせられたることなれば、他力の悲願は、かくのごとし。われらがためなりけりとしられて、いよ／＼たのもしくおほゆるなり。^⑧

と答えて、信心が、どこまでも煩惱の現実を凝視する心であり、もって法蔵菩薩の願心に立ち返り、「われら」なる現実を尽くさんとする心なることを示しているのである。されば、往相回向の信心は、還相回向成就なる願心を自らの境地とすることをもって、全きを得るのである。そ

こに、親鸞は、

南无阿弥陀仏の廻向の 恩徳廣大不思議にて
往相廻向の利益には 還相廻向に廻入せりと、深い恩徳の情をもって讚するのである。

されば、往相回向の信心は、現実を荷負せる法蔵菩薩の願心に感応し同心していく心なるが故に、衆生煩惱海の只中に信心の開発を果しつつけていく心として、教人信の実践性を必然的に有しているのである。そこに、

如来の廻向に帰入して 願作仏心をうる人は
自力の廻向をすてはて、 利益有情はきはもなし

との『和讃』の意がある。それは、信心が、既にきわもなき有情を利益しつつある法蔵菩薩の心に同心したところに開かれる、心境の表白であるといえよう。そして、その心境は、煩惱の身からするなら、どこまでも往相の終極なる浄土往生後の未来の心境として位置づけられ願わべき境といわねばならない。

安樂无量の大菩薩 一生補處にいたるなり
普賢の徳に帰してこそ 穢国にかならず化するなれ

安樂浄土にいたるひと 五濁惡世にかへりては
釈迦牟尼仏のごとくにて 利益衆生はきはもなし
の和讃は、かかる意を讚じたものであろう。

以上の如く了解しようとすするなら、先に述べた、如来の従因向果を往相回向、従果向因を還相回向とするのは、如来・法の立場からの二種回向であり、いま『和讃』の表現を通して尋ねた二種回向は、機・信心の立場からの二種回向であるといえよう。

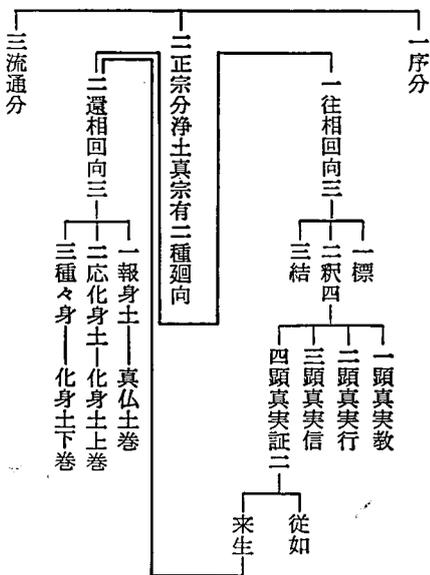
× × ×

「相伝義書」に学ぶことを通して親鸞の二種回向觀を尋ねてきたのであるが、「相伝義書」については、先述した如く筆者自身にとってまだまだ不明な点が多く、本稿において、誤った了解をしているヶ所が多々あることと思う。今後のさらなる研鑽に期するほかはない。

註

- ① 『親鸞全』一—一九
- ② 『親鸞全』四(言行篇(1))—一五
- ③ 『教行信証講義集成』一—二四三
- ④ 『教行信証講義』九—
- ⑤ 『親鸞全』二(漢文篇)—一三三
- ⑥ 『親鸞全』三(和文篇)—二一七
- ⑦ 『親鸞全』一—二二八
- ⑧ 『親鸞全』一—二二九
- ⑨ 『親鸞全』一—二二九
- ⑩ 『親鸞全』二(和讃篇)—一八三

- ⑪ 『相伝義書』三—一二
 - ⑫ 『相伝義書』五—一九六
 - ⑬ 『相伝義書』一—四
 - ⑭ 『相伝義書』三—一三
 - ⑮ 『相伝義書』五—七八
 - ⑯ 『親鸞全』一—一九五
- 「相伝義書」では、この文の「従如来生」から還相回向が開かれるとし、その相を開いたものが「真仏土」「化身土」の二巻であるとして、左記の如き独自の『教行信証』の総科を示している。



- ⑰ 『相伝義書』三—三
- ⑱ 『証卷』の「報応化種種身」が「報・応・化種種身」と記されているが、明らかな誤りといえるので、「報・応・化・種種身」と改めた。
- ⑲ 『相伝義書』三—一三八
- ⑳ 『親鸞全』三(和文篇)—一四五

- ⑳ 『相伝義書』三一三八
㉑ 『相伝義書』四一六二
㉒ 『親鸞全』一一〇〇
㉓ 『親鸞全』一一四八
㉔ 『親鸞全』一一一一
㉕ 『親鸞全』一一三一
㉖ 『親鸞全』二(漢文篇)一一四九
㉗ 『親鸞全』一一九五
㉘ 『相伝義書』八一八
㉙ 『相伝義書』五七七
㉚ 『相伝義書』三一四五
㉛ 『相伝義書』一一六
㉜ 『相伝義書』三一四
㉝ 『相伝義書』五一四六
㉞ 『相伝義書』三一三
㉟ 『親鸞全』三(和文篇)一一一九
㊱ 『親鸞全』一一五一
㊲ 『相伝義書』三一二〇
㊳ 『真聖全』三一四六三
- ㉜ 親鸞の「回向」と「回施」の使い分けについて、未だ充分な理解をなしていない。今後の課題として、使用例を、さらに検討を加える必要がある。
- ㉜ 『真宗教学の中心問題』一一八
㉝ 『親鸞全』二(和讃篇)一一八三
㉞ 『親鸞全』二(和讃篇)一一五
㉟ 『親鸞全』二(和讃篇)一一六
㊱ 『親鸞全』二(和讃篇)一一六九
㊲ 『親鸞全』四(言行篇(1))一一二